東洋大学学術情報リポジトリ　Toyo University Repository for Academic Resources

教相判釈としての転法輪

著者	渡辺 章悟
著者別名	WATANABE Shogo
雑誌名	東洋思想文化
巻	10
ページ	216(1)-193(24)
発行年	2023-03
URL	http://doi.org/10.34428/00014051

Creative Commons : 表示 - 非営利 - 改変禁止
http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/3.0/deed.ja

教相判釈としての転法輪

渡　辺　章　悟

序論

これまで初転法輪の意味や内容について、多くの視点から研究されてきたが、その後の第二、第三の転法輪についてはあまり言及されることはなかった。特に、第二の転法輪は、大乗仏教の成立に深くかかわるものであり、『八千頌般若』を嚆矢として多くの大乗経典に説かれるようになってゆくことは、ほとんど言及されていない。この第二の転法輪が言及されるのは、『解深密経』で第三の転法輪が説かれる際、それに先行する法輪として引用されるために注目されたのであり、その扱いがチベットや中国の瑜伽行唯識学派、あるいはそれを継承する法相教学の系譜の中で注目されていたにすぎない。

本稿ではこの第二の転法輪と第三の転法輪の解釈が、大乗仏教の中でブッダの教えを評価する基準、すなわち教相判釈として機能していたことを明らかにすることによって、大乗仏教の展開を考える一つの視座を提供するものである。

最初にインド仏教に見られる初転法輪の説法形式を確認し、それが「転法輪経」として固定化し、アビダルマや大乗、さらには密教に継承され、第二、第三の転法輪という説法形式によって説かれてゆくことを通観する。そして、それらの転法輪の意味する教説内容がそれぞれ異なっていながらも、新たな教えを開陳する際の説法形式になっている点を指摘する。

この検討によって、あらたな教説の提示と大乗の枠組みの設定に、転法輪が大きな役割を持っていたことを確認し、延いては転法輪を中心とした一つの仏教史観を提示してみたい。

1．初転法輪の描写

初転法輪は『律蔵』「大品」（*Mahāvagga*）に描かれている。それによ

れば、イシパタナのミガダーヤ（鹿野園）にいた五比丘に対して、ブッダが苦楽中道と四諦八正道を説く。さらに四諦それぞれを、「応に＜遍知し、捨断し、現証し、修習＞すべきである」、「已に＜遍知、捨断、現証、修習＞した」、すなわち遍知（parijñā）・捨断（parihāṇa）・現証（sākṣātkriyā）・修習（bhāvanā）という四つを、勧め、示し、証すというように三度繰り返す＜三転十二行相＞によって説かれた。すると、コンダンニャ長老はゴータマ・ブッダが証得した真理を真っ先に理解することができたという。その模様は次のように描かれる。

> また、世尊が法輪を転ぜられた時、地上にいる神々（地居天）は声を発して言った。「このように世尊がヴァーラーナシーのイシパタナにあるミガダーヤ（鹿野園）において転ぜられた最上の法輪は、あるいは沙門、バラモン、神、悪魔、梵天、世間のいかなる人によっても反論され得ないものである」と。
>
> 地上にいる神々の声を聞いて、四大天王たちは声を発して言った。・・・・四大天王たちの声を聞いて、三十三天の神々は、・・・・夜摩天、兜率天、化楽天、他化自在天、梵身天の神々は、声を発して言った。「このように世尊がヴァーラーナシーのイシパタナにあるミガダーヤ（鹿野園）において転ぜられた最上の法輪は、あるいは沙門、バラモン、神、悪魔、梵天、世間のいかなる人によっても反論され得ないものである」と。〔1・30〕
>
> その瞬間、その時刻、その時間に、梵天の世界にまでその声は達した。そして、この十千世界は一斉に震動し、動き、揺れた。そして、無量・広大の光明が現れ、神々の威神力を超えた。時に世尊は、次のような感興の言葉を述べられた。「まことにコンダンニャは了知した、まことに了知した」と。そこで、コンダンニャには「アンニャータ（了知した）・コンダンニャ」という名前が生まれた。〔1・31〕
>
> こうしてコンダンニャは世尊の下で具足戒を得ることになるのである。（PTS, *Vinayapiṭaka* Vol. 1, Mahāvagga, p. 21）

この逸話は『相応部』「如来所説」（tathāgatena vuttā［1］PTS.

SN 5.420-424.［S56.11-12］）やそれに対応する漢訳『雑阿含経』（大正蔵2, No.99（379）103c13-104a29）[1]に見られる有名な箇所であり、単独経典として、安世高訳『転法輪経』（大正蔵2. No.109. 503）、義浄訳『転法輪経』（大正2. No.110. 504）があり、さらには『四分律』（大正蔵22.No.1428. 788a6-c12）、『五分律』（大正蔵22. No.1421.104）、『十誦律』（大正蔵23.No.1435. 449a 7 ）にも掲載されている。

ここで引用した「大品」初転法輪以降のストーリーは、以下の様に五つの要素に分けられる。

（1）世尊が四聖諦を三転十二行相（tiparivaṭṭam dvādasakāraṃ）で説かれた。〔27〕

（2）コンダンニャ長老に「およそ生ずる性質のものは、すべて滅する性質のものである」（kiñci samudayadhammaṃ sabbaṃ taṃ nirodhadhamman）という、穢れを離れた真理を見る眼（法眼）が生じた。〔29〕

（3）地居天及び四天王天から梵身天までの空居天の神々が「世尊がヴァーラーナシーにあるイシパタナのミガダーヤで転ぜられた最上の法輪（anuttaraṃ dhammacakkaṃ）は、いかなるものも反論できない」といって世尊をたたえる。〔30〕

（4）その瞬間にこの声は梵天の世界にまで達し、すべての三千世界は一斉に震動して、揺れた。そして、無量の光明が現れ、世尊はコンダンニャが了知したことをたたえる。〔31〕

（5）こうしてコンダンニャは世尊の下で具足戒を得て出家した。〔32〕

このように、世尊の説法によって初めてさとりを得たコンダンニャと、転法輪―ここでは「無上の法輪を転ずる」とされる―の偉業を神々が讃え、世界が光明に包まれて震動するという要素がこの場面の核となっている。この出来事にもとづいて、後の第二の転法輪が説かれるのである。

---

[1] 本経でも、鹿野苑での五比丘に対する初転法輪を四聖諦の三転十二行で説き、さらにこれを「転法輪経」と名づけるとしている。

また、初転法輪の様子は「転法輪経」を通して『法蘊足論』（大正蔵26.No.1537. 479b）、『鞞婆沙論』（大正蔵28.No.1547.480a）、『阿毘達磨順正理論』（大正蔵29.No.1562.688a）にも引用されるように、有部のアビダルマに継承される。さらに、『阿毘達磨大毘婆沙論』（大正蔵27.No.1545.911c29）にはこの初転法輪について、「なぜ、見道に入らしむる説法のみを法輪というのか」（問何故唯説見道名法輪非餘耶）と問い、見道において四諦十六現観がなされることによって説明しているように、有部では初転法輪によってコンダンニャ（憍陳如）等の五比丘によって得られた境地を見道に限定しているのである[2]。この点を大乗はどのように規定しているのかを含め、大乗の経典に見られる第二の転法輪を見てみたい。

2．第二の転法輪を説く経典

第二の転法輪は多くの大乗経典に見られるが、それが実際にどのような経典に見られるのかを概観し、研究されたことはない。そこで、本稿では訳出年代が明確になる漢訳を基準にしながら、いくつかの典型的な記述を翻訳者の年代順に紹介しておきたい。以下は大乗経典の最古の訳者とされる支婁迦讖から玄奘までの約500年間の翻訳を、古い順に訳者別にまとめたものである。

［1］支婁迦讖（2C後半 Lokakṣema）の訳
　①『伅眞陀羅所問如來三昧経』（大正蔵15、No. 624）
　②『道行般若経』（大正蔵 8、No. 224）
［2］竺法護（239-316 Dharmarakṣa）の訳
　①『仏説海龍王経』（大正蔵15、No. 598）
　②『正法華経』（大正蔵 9、No.263. 75a5 ）
　③『光讃経』（大正蔵 8、No.222）

---

[2] 見道は無漏の智慧によって四聖諦を明確に観察する位のことであるが、修道・無学道と進展する聖者の三道の最初の段階である。『倶舎論』（第六章）でも、聖道に入る準備としての順解脱分（三賢）と、四諦に対する十六行相の観察が順決択分（四善根）の修行道として説かれている。

［3］無羅叉（Mokṣara ?-291）の訳
①『放光般若経』（大正蔵 8、No.221）
［4］鳩摩羅什（Kumārajīva 344-413 or 350-409）の訳
①『大樹緊那羅王所問経』（大正蔵15、No. 625 ）
②『妙法蓮華経』（大正蔵 9、No.262）D113
③『大宝積経』「富樓那會」（大正蔵11、No. 310.443b16）
④『思益梵天所問経』（大正蔵15、No. 586. 56b28）
⑤『摩訶般若波羅蜜経』（大正蔵 8、No.223）
⑥『小品般若波羅蜜経』（大正蔵 8、No.227）
［5］曇無讖（385-433）の訳
①『大般涅槃経』「聖行品」第七（大正蔵12、No.374.445b25）
②『大方等大集経』（大正蔵13、No. 397）
［6］求那跋陀羅（Guṇabhadra 394－468年）の訳
①『仏説菩薩行方便境界神通変化経』（大正蔵9 、No. 271）＝〔7〕①の異訳
②『大法鼓経』（大正蔵9 、No.270）
［7］菩提流支（Bodhiruci ？-527）の訳
①『勝思惟梵天所問経』（大正蔵15、No.587）D160
②『大薩遮尼乾子所説経』（大正蔵9 、No.272）（*［'phags pa］ byang chub sems dpa'i spyod yul gyi thabs kyi yul ba rnam par 'phrul ba bstan pa*）≒*Ārya-bodhisattva-gocara-upāya-visaya-vikurvāna-nirdeśa,* D 146, Pa82a3-141b7
［8］玄奘（602-664）の訳
①『大般若波羅蜜多経』（大正蔵7 、No.220）
②『解深密経』（大正蔵16、No.676）D106

・その他、第二の転法輪は次のような経典にもみられる。また、これらの多くはそのチベット語訳にも確認できる。
1）『大宝積経』「善住意天子会」第三十六（大正蔵11、No.310-36）隋・達摩笈多訳
2）『大方広入如来智慧不思議経』（大正蔵10、No.304）唐・実叉難陀訳 D185
3）『大乗大方等日蔵経』（大正蔵13、No. 397-14）隋・那連提耶舎訳

D257

4）『大方等大集経賢護分』（大正蔵13、No. 416 ）隋・闍那崛多訳

5）『宝雲経』（大正蔵16、No. 658）梁・曼陀羅仙訳　D231

6）『除蓋障菩薩所問経』（大正蔵14、No. 489）宋・法護（Dharmarakṣa）等訳

7）『大宝広博樓閣善住秘密陀羅尼経』（大正蔵19、No.1005A）唐・不空訳

8）『一切法功徳荘厳経』（大正蔵21、No.1374）唐・義・浄訳　D527

9）『金剛場荘厳般若波羅蜜多経中一分』（大正蔵18、No.886）宋・施護訳　D490

10）『諸仏集会陀羅尼経』（大正蔵21、No.1364）唐・提雲般若訳　D513

3．第二の転法輪の用例

このように第二の転法輪は多くの大乗経典に見られるが、初期大乗の最古の漢訳としては、支婁迦讖の訳業が重要である。支婁迦讖（lokakṣema）は大月氏出身で、後漢の桓帝末期の二世紀後半に洛陽を訪れ、『道行般若経』（179年訳）をはじめ、『般舟三昧経』『阿閦仏国経』『阿闍世王経』など多くの初期大乗経典を翻訳したことで知られる。支婁迦讖の訳した大乗経典の中では、第二の転法輪が『道行般若経』と『伅真陀羅所問如來三昧経』の二経典中に説かれている。ここではこの二経典について、実際の記述を確認してみたい。最初に、『道行般若経』とそれに関連する般若経典群の記述を指摘しておきたい。

（1）般若経の転法輪

『道行般若経』の第二の転法輪は、同系統の漢諸訳ばかりでなく、『十万頌般若』・『二万五千頌般若』・『一万八千頌般若』・『一万頌般若』・『八千頌般若』のサンスクリットのすべての拡大般若に見られる。

初期般若経の中で、最も祖型をととどめるのは小品系般若であるが、その系統で現存するサンスクリット文『八千頌般若』（*Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā,* 以下AS）に見られる第二転法輪の前後の記述を見ておきたい。もちろん般若経は全編にわたって般若波羅蜜の意義を説いているが、この第二転法輪として説示されたものこそが、般若波羅蜜の意味

として最も重要なのである。

AS「讃嘆品」第九章では、ブッダとスブーティの問答によって般若波羅蜜とは何かという解説が、さまざまな観点から述べられる。それをまとめると、以下のようになる。

1）般若波羅蜜とは名称にすぎず（prajñāpāramiteti・・・nāmadheyamātram）、存在せず、認識できない（na vidyate nopalabhyate）。

2）色形（乃至五蘊）が清浄であるから、般若波羅蜜は清浄である（rūpaviśuddhitaḥ・・・pariśuddhā prajñāpāramitā）。

3）月の8・14・15日〔という三斎日〕に、説法者（dharmabhāṇaka）があちこちで般若波羅蜜を語るならば、多くの福徳が生まれるだろう[3]。

4）般若波羅蜜を説く説法者は、多くの神々によって護衛・守護・防御される[4]。

5）般若波羅蜜は無上の宝であり（prajñāpāramitā anuttaraṃ ratnam）、そのことから多くの福徳を生むでしょう（tatonidānaṃ bahutaraṃ puṇyaṃ prasaviṣyati）。

6）般若波羅蜜は、世の幸福と安楽のためにはたらき、すべてのものを生ぜず、滅せず、汚さないために、“不壊という方法で”奉仕する。（prajñāpāramitā hitāya sukhāya pratipannā lokasya sarva-dharmāṇm anutpādāya-anirodhāya-saṃkleśāy-avināśa-yogena pratyupasthitā）

7）いかなるものにも付着させず、いかなるものも汚されず、いかなるものをも掌握しない。不可得であるから、汚れがない。（anupalabdhitaḥ …… anupaliptā prajñāpāramitā）

8）しかも「このように意識しないならば、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜へ

---

[3] aṣṭamīṃ caturdaśīṃ pañcadaśīṃ ca sa dharmabhāṇakaḥ kulaputro vā kuladuhitā vā yatra yatra prajñāpāramitāṃ bhāṣiṣyate, tatra tatra bahutaraṃ puṇyaṃ prasaviṣyati（AS.Vaidya［1960.100］）．なお、三斎日は、『小品』（大正蔵No.227.8.553a3-4）では、8・14・15・23・29・30日の六斎日とする。

[4] tāni ca rakṣāvaraṇaguptiṃ saṃvidhāsyanti tasya dharmabhāṇakasya imāṃ prajñāpāramitāṃ bhāṣamāṇasya /（AS.Vaidya［1960.101］）

の道を追求するのである」。（saced evam api …… na saṃjānīte carati prajñāpāramitāyāṃ）

このようなブッダの般若波羅蜜についての説示を聞いて、神々が以下のように讃嘆するのである。

その時、何千何万という神々が空中で〔喜んで〕叫び笑い、衣を振って、“嗚呼、ジャンブードゥヴィーパ（閻浮提）において、二度目にこの教えの輪が回転されるのを見る”といった。（dvitīyaṃ batedaṃ dharmacakrapravartanaṃ jambūdvīpe paśyāma iti cāvocan/）

（AS：Vaidya［1960：101］）

本経で述べる第二転法輪の教えとは、このような般若波羅蜜のことである。そしてその教えが第二の転法輪として劇的に語られながらも、本経では第二の転法輪と初転法輪を比較するような記述は見られない。

この箇所に対応する漢訳を見ると、『道行般若経』以下、多くに共通してみられるが、以下のように比較的簡潔な表現で記されるのみである。

・三千大千刹土諸天子飛在上俱皆觀。便擧聲共嘆曰。於閻浮利地上再見法輪轉。（『道行般若経』大正蔵No.224.8. 443c29-444a2）

・是時若干百千諸天子踊躍歡喜。於虚空中同聲唱言。我於閻浮提。再見法輪轉。（『小品般若経』大正蔵No.0227.8.553a14-16）

・時有無量百千天子住虚空中。歡喜踊躍互相慶慰。同聲唱言我等今者。於贍部洲見佛第二轉妙法輪。（『大般若波羅蜜多経』「第四会」大正蔵No.220.7.804c9-12）

・時有無量百千天子。住虚空中歡喜踊躍。互相慶慰同聲唱言。我等今者於贍部洲。見佛第二轉妙法輪。（『大般若波羅蜜多経』「第五会」大正蔵No.220.7.887a12-14）

・『二万五千頌般若』（PV）に見る第二転法輪

この箇所をASの拡大版である『二万五千頌般若』（PV）と比較すると、いくつか重要な相違がみられる。もともとこの二つのテクストは共通する文面も多いが、正確に対応するわけではない。ここでは特にその相違

する箇所に注目し、異なる部分に下線を引いておいた。

atha khalu saṃbahulāni devaputraśatasahasrāṇy upary antarīkṣe sthitvā kilikilāprakṣveḍitāny akārṣur divyāni cotpalakumudapuṇḍarīka-padmamāndāravāṇi puṣpāṇi kṣipanti sma. evaṃ ca vācam abhāṣanta, dvitīyaṃ batedaṃ dharmacakrapravartanaṃ jāmbūdvīpe paśyāmaḥ. prajñāpāramitāyāṃ nirdiśya mānāyāṃ tatrānekāni devaputrasahasrāṇy anutpattikeṣu dharmeṣu kṣāntiṃ pratilabhante sma. (2)atha khalu bhagavān sthaviraṃ subhūtim āmantrayāmāsa: nedaṃ subhūte dvitiyaṃ dharmacakrapravartanaṃ nāpy ekaṃ nāpīyaṃ prajñāpāramitā kasyacid dharmasya pravartanāya vā nivartanāya vā pratyupasthitā. tat kasya hetor? abhāvasvabhāvaśūnyatām upādāya.
subhūtir āha: katamā bhagavann abhāvasvabhāvaśūnyatā yad iyaṃ prajñāpāramitā na kasyacid dharmasya pravartanāya vā nivartanāya vā pratyupasthitā?
bhagavān āha: prajñāpāramitā subhūte prajñāpāramitayā śūnyā. (PV Ⅱ・Ⅲ［Kimura 1986], pp.184.15-185.11）以下略

このように、ASに対応するPVの個所では、空中の神々が天上のウトパラやパドマなど様々な蓮華の花々を散華したことを詳細に伝え、「このジャーンブードゥヴィーパで第二の法輪が転ぜられているのを見る」と讃嘆した後で、下線部の「そこで何千もの神々が無生法忍を得た」(tatrānekāni devaputrasahasrāṇy anutpattikeṣu dharmeṣu kṣāntiṃ pratilabhante sma.［Kimura 1986：p.184, ll.19-20］）とする文脈が付加される[5]。それは他の大品系の漢訳も同様である。この無生法忍とは大乗仏教に特有の智慧の一種であるが、「諸法は無自性であるがゆえに、

[5] 無生法忍（anutpattika- dharma- kṣānti-）はASにはなく、PVより見られる。『大般若波羅蜜多経』では、第四会にはなく、「初会」・「第二会」・「第三会」から見られる。ただし、チベット語訳『八千頌般若』、『二万五千頌般若』にはこの箇所の無生法忍はない。

本来無生であるという真実を、耐えて受け入れること〔忍智〕」である。不退転菩薩はこの無生の真理を受容してから悟入するのである。

このように般若経における第二の転法輪は、AS系統では般若波羅蜜の説法であり、PV系統ではこれに無生法の忍智が加わるのである。ただし、この当該箇所には見られないが、小品系では別の箇所でこの無生法忍の語は用いられており、『道行』、『大明度』、『摩訶般若鈔経』といった古い翻訳ではこれを「無所從生法楽〔忍〕」、『小品』、『仏母出生』では「無生法忍」と訳し、大品系の『放光』、『光讃』になると「無所従生法忍」とも訳され、般若経の重要な思想として頻出する。

（1）『伅眞陀羅所問如來三昧經』における第二の転法輪

本経はDruma-kinnarāja-paripṛcchāというが、サンスクリット原文は現存せず、一部が断片で残るのみ。漢訳には以下の二種があり、チベット語訳も完訳がある[6]。

1）『伅眞陀羅所問如來三昧経』（大正蔵15、No. 624 支婁迦讖譯）
2）『大樹緊那羅王所問経』（大正蔵15、No. 625 鳩摩羅什譯）

本経の梵語名は*Drumakiṃnararājaparipṛcchā*であるが、支婁迦讖譯の「伅眞陀羅（とんしんだら）」とは、伅（druma樹木）と眞陀羅（kiṃnara緊那羅）の音訳であり、羅什訳『大樹緊那羅王所問経』はこれを意訳したものである。本経では緊那羅王は理想的な大乗菩薩として描かれるが、この名は『法華経』（KN ed., p.4, *ll.*13-15）の対告衆に、四名の緊那羅王として登場するので、本経を知っていたのかもしれない。

漢訳『伅眞陀羅所問如來三昧経』は月氏の支婁迦讖によって、建和元年から中平三年の間（AD147-186）に翻訳されているので、本経の成立は少なくとも2世紀初頭にまでたどれる。また、『大智度論』（大正蔵

---

6 チベット語訳にはPaul Harrisonによる校訂テクストも出版されている。
Harrison, Paul M. ed., *Druma-kinnara-rāja-paripṛcchā-sūtra: a critical edition of the Tibetan text（recension A）based on eight editions of the Kanjur and the Dunhuang manuscript fragment*. Studia philologica Buddhica Monograph series 7. Tokyo：International Institute for Buddhist Studies, 1992.

No.1509.25.135c15-17, 188b9）にも引用されていることから、最初期の大乗の経典の一つとみなされる。

・本経の概要

本経は三解脱門や無生法忍、六波羅蜜に方便波羅蜜を加えた七波羅蜜、二諦、入不二門、心性本浄、如・法性・実際の三空、変成男子説などを説くことから、大乗的思想が明確に指摘できる。

その思想内容としては、空性を基盤としつつ、般若を諸経中の主と呼び、その主たる三昧である「宝如来三昧」の体として二十を超える三昧を説くように、三昧を主眼とする経典である。また、菩薩の種々の行が四種にまとめられて説かれ、六波羅蜜と方便、法施などの菩薩の実践に三十二の功徳があることを説くなど、多くの法相が列挙されているのも特色の一つである。以下は便宜上、羅什訳『大樹緊那羅王所問經』の当該箇所を引用する。本経の最後には、その利益が勝れていることを自ら讃嘆して、次のように説く。

〔仏が〕この法を説かれる時、無量の衆生は、無上正眞道の心に住し、九万二千の菩薩は無生法忍を得、八万四千の衆生は塵垢を遠離し、法眼の淨かなるを得。八千の比丘は諸漏を尽くして心に解脱を得たり。時に此の三千大千世界は六種に震動し、大光普く照して天より衆花を雨す。百千の伎樂は鼓せずして自から鳴り、百千万億那由他の天は、歡喜踊躍して稱讃歌嘆するに、「我等、今、閻浮提中において、再び法輪の転ぜらるを見る。世尊、昔、波羅捺國に在りて、正法輪を転じ、利する所の衆生と、今、是の経を説きて利する所の衆生とを、是れ殊勝と為す」。其れ衆生ありてこの経を持する者、この人は久しからずしてまさに法輪を転ずべし。

爾の時、彌勒菩薩・天冠菩薩・大徳阿難等、白して言く、「世尊よ、當に此の經を何と名づけ、云何に受持すべきや」。佛言く、「善男子よ、是の經を名けて＜大樹緊那羅王所問＞と爲す。亦た＜宣説不思議法品＞と名く。是の如く受持すべし」。佛是の經を説き已ると、彌勒菩薩・天冠菩薩・大徳阿難等、一切の大衆・天・龍・夜叉・乾闥婆、佛の説く所を聞きて、皆大いに歡喜せり。

説是法時。無量衆生住於無上正眞道心。九萬二千菩薩得無生法忍。八萬四千衆生遠離塵垢得法眼淨。八千比丘盡於諸漏心得解脱。時此三千大千世界六種震動。大光普照天雨衆花。百千 伎樂不鼓自鳴。百千萬億那由他天。歡喜踊躍稱讃歌嘆。我等今於閻浮提中。再見法輪轉。世尊。昔在波羅捺國。轉正法輪所利衆生。今説是經所利衆生。是爲殊勝。其有衆生持是經者。是人不久當轉法輪。

爾時彌勒菩薩天冠菩薩。大德阿難等白言。世尊。當何名此經。云何受持。佛言。善男子。是經名爲大樹緊那羅王所問。亦名宣説不思議法品。如是受 持。佛説是經已。彌勒菩薩天冠菩薩大德阿難等。一切大衆天龍夜叉乾闥婆。聞佛所説皆大歡喜（T625.15.388c16-389a2）

漢訳は二訳ともに、閻浮提における二度の転法輪、すなわちヴァーラーナシーにおける初転法輪と、本経の〔王舎城の霊鷲山での〕転法輪に言及する。また、両訳共にこの説法によって九万二千の菩薩が、みな無生法忍（支婁迦讖訳「無所從生法忍」）を得たとする。羅什訳によれば天子たちが釈尊の説法を讃嘆して、「我等、今、閻浮提中において、再び法輪の転ぜらるを見る。世尊、昔、波羅捺國に在りて、正法輪を転じ、利する所の衆生と、今、是の経を説きて利する所の衆生とを、是れ殊勝と為す。其れ衆生ありてこの経を持する者、この人は久しからずしてまさに法輪を転ずべし。（昔在波羅捺國。轉正法輪所利衆生。今説是經所利衆生。是爲殊勝）」とし、二回の転法輪によって教化する衆生〔の利益〕がともに勝れたものであるが、この経を保持するものは、悟りを得て、やがて法輪を転ずるであろうとまで述べている。

一方、支婁迦讖訳では、「波羅那界において法輪を轉じ、多くの安隱を得るも、今この説くところに如かず。復た増加し轉倍せり」（於波羅那界轉於法輪。多得安隱。不如今之所説復増加轉倍。）[7]とし、本経を説くことによる〔功徳の方〕が勝れていることを述べている。

チベット語訳では、「私たち（神々）はちょうどジャーンブードゥヴィーパで二回目の転法輪を見る。世尊がこの法門を教示し、説き明かして、

---

[7] 吾等於閻浮利。再見法輪而轉。如怛薩阿竭。於波羅那界轉於法輪。多得安隱。不如今之所説復増加轉倍。（大正蔵No.624.15.367b4-7）

衆生への利益をなすところのもの、これはヴァーラーナシー国で転法輪がなされたものであり、衆生を完全に成熟させる。このことから、最勝なのです」[8]という。

このように本経で説かれる第二転法輪は、般若経で説かれる第二転法輪をモデルにしつつ、説法の場を王舎城の霊鷲山とし、自らの新たな教えを説示する場として設定する。そして、この第二の転法輪が衆生を教化し、九万二千の菩薩に無生法忍を生じさせ、八千の比丘に心解脱を得させるばかりか、この教えを保持する者がさらに新たな転法輪を起こすであろうと述べる。

但し、ここで注意すべきは第一と第二の転法輪の優劣についてである。羅什訳とチベット語訳では第二の転法輪は、第一の転法輪に匹敵する殊勝なものであることを述べているに過ぎず、優劣が示されているわけではない。しかし、支婁迦讖訳では、「不如今之所説」としているので、少なくとも今現在の説法が勝れているとするようである。

4．複数の転法輪を説く経典

次にこのような転法輪が説かれる背景として、説出世部の仏伝として知られるMahāvastu-avadāna『大事』の用例を見てみたい。

①Mahāvastu-avadāna『大事』（以下MVUと略）

過去仏である世尊カーシャパが、比丘ジョーティパーラに記別を授けたという「ジョーティパーラ経」に説かれる一節で、釈迦牟尼仏がアーナンダにその内容を回想しつつ教示する。その世尊カーシャパの授記に対し、神々が「未来世に、彼（ジョーティパーラ）は如来になるであろう。彼は、この世間やかの世間を知り、神・ブラフマン、沙門・バラモンを含んだ世間を知り、人天を含んだ有情を知った後、この同じヴァーラーナシー郊外のリシヴァダナの鹿野苑で、どんな沙門やバラモンや

---

[8] bdag cag gis 'dzam bu'i gling du chos kyi 'khor lo lan gnyis bskor ba 'di mthong ngo //bcom ldan 'das kyis gang yang chos kyi rnam grangs 'di bstan te bshad nas/ sems can gyi don mdzad pa gang lags pa 'di ni grong khyer ba ra na sir chos kyi 'khor lo bskor te/ sems can yongs su smin par mdzad pa de bas ches mchog go// （Harrison［1992: 300, *l*.12–301, *l*.4］）

マーラやブラフマンによっても転じられたことがない、＜三転十二行相の法輪＞を転ずるであろう」云々と讃える。〔MVU 1.333-332〕[9]

この場面は律蔵・大品や『転法輪経』に説かれる内容と一致する。さらに、別の箇所ではあるが、「世尊が最初に『転法輪経』を〔説かれたとき〕、アージュニャータ・カウンディンヤと十八コーティもの神々は、〔世尊に〕教化された。それら神々は神の住居に〔そのことを〕告げながら、それぞれの住居に戻ったのである」[10]といい、以下『転法輪経』（*dharmacakrapravartanasūtra*）が合計４回、神々に説かれたという。そして、その結果として天子（devaputra）たちは順次、初果、悪趣から解脱し、預流果を得たとする。

このMVUの用例は、『律蔵・大品』及び『転法輪経』を忠実に継承しながら、過去仏信仰を踏まえつつ、複数の転法輪を説くものである。複数のブッダの存在があれば、当然複数の転法輪もあってしかるべきだからである。しかし、これはあくまで固定化した仏伝の展開を出ることがない仏伝文献の展開の一つであって、聴聞によって得られる結果も、初果から、悪趣からの解脱、預流果までにとどまる。大乗経典のように「転法輪経」と異なる「新たな教説」を展開するまでにはなっていない。しかし、大乗の複数の転法輪を説く契機となっていることは否定できないだろう。

---

[9] eṣo māriṣa bhagavatā kāśyapena jyotipālo nāma bhikṣu vyākṛto so bhaviṣyati anāgatam adhvānaṃ tathāgato 'rhaṃ samyaksaṃbuddho vidyācaraṇasampanno sugato lokavid anuttaraḥ puruṣadamyasārathiḥ śāstā devānāṃ ca manuṣyāṇāṃ ca // so imaṃ ca lokam abhijñāya paraṃ ca lokaṃ abhijñāya sadevakaṃ ca lokaṃ ca sabrahmakaṃ saśramaṇabrāhmaṇīṃ prajāṃ sadevamanuṣyām abhijñāya iha eva vārāṇasīyaṃ ṛṣivādane mṛgadāve dharmacakraṃ pravartayiṣyati triparivartaṃ dvādaśākāraṃ apravartiyaṃ śramaṇena vā brāhmaṇena vā devena vā māreṇa vā brahmaṇā vā kenacid vā punar loke saha dharmeṇa //（[MVU, 1.333]）「友よ、世尊はヴァーラーナシーの鹿野園・リシパタナで三転十二行相の無上の法輪を転じられた。〔この法輪は〕どのような沙門・バラモン・天・マーラや〔他の〕誰も法に随順して世間で転ずることのできないものである。」

[10] bhagavatā prathame dharmacakrapravartanasūtre ājñātakauṇḍinyaḥ aṣṭādaśā ca devakoṭīyo vinītā te devā devabhavaneṣu ārocentā svakasvakāni bhavanāni gacchanti //〔MVU3.345〕

②『大乗無量義経』の初説・中説・今説

これに対して、大乗の複数の転法輪はその意味を異にする。このことは第二転法輪で詳述したので、以下は大乗の複数の転法輪を説く経典の例として、『無量義経』の三会について解説しておきたい。

本経にはサンスクリット原典もチベット語訳もなく、曇摩伽陀耶舎による漢訳のみ現存する[11]。本経の訳者とされる曇摩伽陀耶舎（dharmagatayaśas）は、南朝の斉代初め高帝の時に中国に渡来したインド僧で、480年（建元２年）広州（広東省）の朝亭寺において『無量義経』を訳出した。そしてこの経を伝授された慧表が揚州に将来し、繕写流布されたものとされる[12]。

善男子よ、我れ樹王（菩提樹）を起ちて、波羅奈の鹿野園中に詣って、阿若拘隣等の五人の為に＜四諦＞の法輪を転ぜし時、また「諸法は本來空寂なり、代謝して住せず、念念に生滅す」と説く。

中間に此及び処々において、諸々の比丘ならびに衆の菩薩のために、＜十二因縁・六波羅蜜＞を辯演し、宣説し、また「諸法は本來空寂なり、代謝して住せず、念念に生滅す」と説く。

今復此において、＜大乗無量義經＞を演説するに、また「諸法は本來空寂なり、代謝して住せず、念念に生滅す」と説く。

善男子、是の故に初説・中説・今説、文辭は是れ一なれども而も義は差異なり。義異なるが故に、衆生の解異なり。解異なるが故に、得法・得果・得道亦た異なり。

善男子よ、初め＜四諦＞を説いて声聞を求める人の為めにし、而も八億の諸天、來下して法を聴いて菩提心を発し、中〔ころ〕に處々において甚深なる＜十二因縁＞を演説して、辟支佛人を求める人の為めにし、而も無量の衆生、菩提心を発し、或いは聲聞に住せり。次に＜方等十二部經・摩訶般若・華嚴海雲（空）〔経〕＞を説いて、

---

[11] このことから本経には偽経説もある。詳細は拙稿「第二の転法輪」『駒澤大學佛教學部論集』51号、2020年12月26日、pp.1-13（Left）.〕及び、「般若経の第二の転法輪」『東方』第37号、（公財）中村元東方研究所, 2022年３月, pp.105-121参照。

[12] 『出三蔵記集』（大正蔵No.2145. 55, 13b13, 68b4ff）.

菩薩の歴劫修行を演説し、而も百千の比丘、萬億の人天、無量の〔衆生〕、須陀洹を得、斯陀含を得、阿那含を得、阿羅漢を得て、辟支佛の因縁の法の中に住す。〔中略〕

この故に善男子よ、是の義を以っての故に、故に知りぬ。説は同じけれども、而して義は別異なり。義異なるが故に、衆生の解異なり。解異なるが故に得法・得果・得道亦た異れり。是の故に善男子よ、我れ道を得て初めて起ちて法を説きしより、今日、大乗無量義經を演説するに至るまで、未だ曾って苦・空・無常・無我・非眞・非假・非大・非小・本來然らず（異読：生ぜず）、今亦滅せず、一切（異読：相）・無相・法相・法性・不來・不去なり、而も衆生は四相に遷さると説かざるにあらず。

善男子。我起樹王詣波羅奈鹿野園中。爲阿若拘隣等五人轉四諦法輪時。亦説諸法本來空寂代謝不住念念生滅。中間於此及以處處爲諸比丘并衆菩薩。辯演宣説十二因縁六波羅蜜。亦説諸法本來空寂代謝不住念念生滅。今復於此演説大乗無量義經。亦説諸法本來空寂代謝不住念念生滅。善男子。是故初説中説今説。文辭是一而義差異。義異故。衆生解異。解異故。得法得果得道亦異。善男子。初説四諦。爲求聲聞人。而八億諸天來下聽法。發菩提心。中於處處演説甚深十二因縁。爲求辟支佛人。而無量衆生發菩提心。或住聲聞。次説方等十二部經摩訶般若華嚴海。演説菩薩歴劫修行。而百千比丘萬億人天無量得須陀洹得斯陀含得阿那含得阿羅漢。住辟支佛因縁法中。善男子。以是義故。故知説同而義別異。義異故。衆生解異。解異故。得法得果得道亦異。是故善男子。自我得道初起説法至于今日。演説大乗無量義經。未曾不説苦空無常無我。非眞非假非大非小本來不然。今亦不滅一切無相。法相法性不來不去。而衆生四相所遷。（大正蔵No.276.9.386b21-386c5）

このように本経では初説・中説・今説として、三度の仏の説法を述べている。しかし、初説として「＜四諦＞の法輪を転ぜし時」とするが、中説は「＜十二因縁＞を演説し」とし、今説は「＜方等十二部經・摩訶般若・華嚴海雲（空）〔経〕＞を説いて」とあり、必ずしもすべて転法

輪という表現ではないが、意味上は明らかに三つの転法輪である。この転法輪は、声聞・辟支佛・菩薩の三乗を対告衆とし、最後の個所で、得道の後の初めての説法から、今日のこの「＜大乗無量義経＞を演説するに至るまで」とあるように、方等経十二部経などの大乗経典のアンカーとしてこの『無量義経』を位置づけている。

以上のように、明確な表現とは言えないが、この文脈で理解する限り、大乗、特にこの経典こそを最後（第三の）転法輪とみなしているようである。

③『宝積経』の三時の転法輪

本経（『宝積経』羅什訳「富樓那会」第十七、「神力品」第五会）では、仏に対する第一の供養とは何かを説くところで、香華幡蓋瓔珞などを以って仏を供養することではなく、この経を受持・読誦し、説の如くに行ずることこそが第一供養であり、その理由として、諸仏はみな法を供養し、恭敬し、尊重し、世間の供養を貴ばないからであると述べる。こうして仏は阿難にこの経典を丁重に嘱累するのである。この後、次の様に続く。

> 我是の如き等の経を学んで、今阿耨多羅三藐三菩提を得て無上の法輪を転じ、過去の諸佛ももと菩薩道を行ずる時に、亦是の如き等の経を学び、阿耨多羅三藐三菩提を得て、無上の法輪を転ず。未来の諸仏も亦是の如き等の経を学び、当に阿耨多羅三藐三菩提を得て、無上の法輪を転ずべく、現在の十方世界の諸仏も、菩薩道を行ずる時に、亦是の如き等の経を学び、阿耨多羅三藐三菩提を得て、今法輪を転ず。
> この故に阿難よ、この菩薩蔵経を名づけて転法輪経と為し、当にこれを奉持すべし。
> 我波羅奈国の梨師山の鹿園の中において、声聞弟子のために法輪を転ぜしが、阿難、我今この竹林において、この菩薩蔵経の不退転の輪を転じて、一切衆生の疑いを断ずるなり。
>
> 我學如是等經。今得阿耨多羅三藐三菩提。轉無上法輪。過去諸佛本

行菩薩道時。亦學如是等經。得阿耨多羅三藐三菩提。轉無上法輪。未來諸佛亦學如是等經。當得阿耨多羅三藐三菩提。轉無上法輪。現在十方世界諸佛。本行菩薩道時。亦學如是等經。得阿耨多羅三藐三菩提。今轉法輪。是故阿難。是菩薩藏經。名爲轉法輪經。當奉持之。我於波羅奈國梨師山鹿園中。與聲聞弟子轉於法輪。阿難。我今於此竹園中。轉此菩薩藏經不退轉輪斷一切衆生疑。（『大寶積經』巻第七十八、「神力品第五」大正蔵No.310.11.450a9-19）

今こうして無上正等正覚を得て、無上の法輪を転ずるのであるが、それは現在、過去、未来の諸仏が菩薩道を行ずる時、皆この経を学習し、無上正等正覚を得て、法輪を転ずるからである。このように、諸仏は必ず無上の法輪を転ずるのだが、それが今、この竹林精舎で説かれるこの「菩薩蔵経」であり、それを「転法輪経」であると言い換える。この意味で「転法輪経」とは、初期仏教からブッダの初転法輪を説くとされる固有の経典ではなく、あらたな大乗の法輪を説く「転法輪経」なのである。そしてこれを不退転の〔法〕輪とし、この法輪を転じて衆生の疑惑を断滅するという。

このように本経では、あらたな大乗の教えとして、「菩薩蔵経」を宣説し、過去・未来・現在と三時に共通する転法輪のあり方を述べる。その意味で、ここに第二の転法輪という言い方は見られないが、ヴァーラーナシーの鹿野園で声聞たちに説いた法輪に対して、まさに「今、ここ（竹林園）で説かれている」という「今の転法輪」がそれに当たるのは明白である。

④『解深密経』の三転法輪と般若経

次に注目するのは般若経に後続する瑜伽行派の根本経典『解深密経』に説かれる三転法輪である。本経の転法輪説は、瑜伽行派の中で注目され、大乗仏教の転換点と見なされた。

本経は四世紀頃に成立したが、『解深密経』自身が般若経に説かれた第二転法輪を引用し、仏教思想界に定着していたこの学説を踏まえ、さらにそれを超えて瑜伽行派の教えを第三の転法輪として区別し、そこにおいてブッダの深い教説が示されたと意義づけている。以下に玄奘訳『解

深密経』「無自性相品第五」に説かれる転法輪説を引用しておこう。

その時、勝義生菩薩がまたブッダに申し上げた。世尊が初めに、あるとき婆羅疱斯（バラナシ）の仙人堕処施鹿林中にあって、ただ声聞乗に向かって修行する者のために、＜四諦の相＞により、正法の輪を転じた。このことは甚だ奇異にして甚だ希有であるとし、一切の世間諸天人等が以前にこのような教えを転じたことがなかったといっても、その時に説かれた法輪は、まだ完全ではなく未了義であり、諸の諍論が生ずることになる。

世尊が昔、第二の〔転法輪の〕中の時、ただ大乗を修めんと修行している者のために、一切法が皆無自性・無生無滅・本来寂静・自性涅槃であることによって、＜隠密の相＞により、正法の輪を転ずる。これは更に甚だしく希有であるといっても、この時に転じられた法輪も、まだ完全ではなく、なお未了義であって、諸の諍論が生ずることになる。

世尊、今この第三の〔転法輪〕中の時、普く一切乗に向かって修行する者のために、一切法の皆無自性・無生無滅・本来寂静・自性涅槃である無自性性によって、＜顕了の相＞により、正法の輪を転じた。これは最も甚だしく奇異であっても希有であるとする。今、世尊の転ずる法輪は、この上なく疑問の余地なく、真の了義であって、もはや諍論が生ずるものではない。

爾時勝義生菩薩復白佛言。世尊。初於一時在婆羅疱斯仙人墮處施鹿林中。惟爲發趣聲聞乘者。以四諦相轉正法輪。雖是甚奇甚爲希有。一切世間諸天人等先無有能如法轉者。而於彼時所轉法輪。有上有容是未了義。是諸諍論安足處所。(4)世尊。「在昔第二時中惟爲發趣修大乘者。依一切法皆無自性無生無滅。本來寂靜自性涅槃。」以隱密相轉正法輪。雖更甚奇甚爲希有。而於彼時所轉法輪。亦是有上有所容受。猶未了義。是諸諍論安足處所。世尊。於今第三時中普爲發趣一切乘者。依一切法皆無自性無生無滅。本來寂靜自性涅槃無自性性。以顯了相轉正法輪。第一甚奇最爲希有。于今世尊所轉法輪。無上無容是眞了義。非諸諍論安足處所。世尊。若善男子或善女人於此如來依一切法皆無自性無生無滅。本來寂靜自性涅槃。所説甚深了義言教。

（『解深密経』大正蔵16、No.676. 697a23-b11）

上記のように、それぞれブッダの三時の転法輪の対象に、「惟…声聞乗」「惟…大乗」「普…一切乗」という三つの区分が用いられている。般若経ASの第二転法輪に対応するのは、第二時中の大乗の転法輪であるが、下線部(4)のように、本経では「世尊。在昔第二時中惟爲發趣修大乗者。依一切法皆無自性無生無滅。本來寂靜自性涅槃。」（697a28-b1）としている。これは般若経の第二の転法輪の(1)から(4)をまとめたものと考えられる。

また、ここで注意すべきなのは、第二時と第三時で説かれた内容（下線部）が殆ど同一でありながら、その違いが「無自性性」の有無と「隠密相」・「顕了相」という説示方法の差異に求められているという点である。

ただし、チベット語訳[13]によれば、「隠密相」は「空性を説くあり方」(stong pa nyid smos pa'i rnam pa)、「顕了相」は「善く区別されたあり方」(legs par rnam par phye ba）となっており、玄奘の訳は文脈から理解した異訳と考えられる。

---

[13] 以下、袴谷憲昭［1994：206-207］によるチベット語の和訳と当該のチベット語原文をあげておく。

「一方、世尊は、諸法の無自性性に依拠し、無性と、無滅と、本来寂静と、本性として完全に開放されたもの（自性涅槃）であるということに依拠して、大乗に出立したものたちに対して、空性を説く様相（隠密相）をもって、より素晴らしく、驚くべきものである第二法輪を転じたのですが、世尊によって転じられたその法輪も、その上のあるもの（有上）であり、まだ余地のある者（有所容受）であり、未了義であり、論争の拠り所の基盤（諍論安足処所）となっているものでございます。」

bcom ldan 'das kyis chos rnams kyi ngo bo nyid ma mchis pa nyid las brtsams/ skye ba ma mchis pa dang /（49-1-25a）'gag pa ma mchis pa dang / gzod ma nas zhi ba dang / rang bzhin gyis yongs su mya ngan las 'das pa nyid las brtsams nas theg pa chen po la yang dag par zhugs pa rnams la stong pa nyid smos pa'i rnam pas ches ngo mtshar rmad du byung ba'i chos kyi 'khor lo gnyis pa bskor te/ bcom ldan 'das kyi chos kyi 'khor lo bskor ba de yang bla na mchis pa/ skabs mchis pa/ drang ba'i don rtsod pa'i gzhi'i gnas su gyur pa lags la/（Ded. No.106.49-1-24b ～25a）

さらに、「無自性性」とは、同じ無自性相品の中に「我は三種無自性性に依りて密意に一切諸法皆無自性を説けり」とあることから三無自性を指していることが分かる。

以上のことを考え合わせると、玄奘訳『第二会』では第二時と第三時の関係が、「第二時において既に一切法の無自性空は説かれたが、その意味は秘匿されており、第三時で三無性説が説かれ、初めてその意味が明瞭となった」という意味が読み取れる。そして、第一時と第二時の教えは未了義であり論争の生ずる余地があるが、第三時の教えは了義であり論争の生じる余地はないともいう。

このように、般若経で説かれた第二の転法輪は、あらたな大乗の提示という意味であったが、さらに『解深密経』では、自らの主張である瑜伽行唯識の教説こそが第三の転法輪であるとして、段階的な教説の進展を主張する根拠となったのである。

この主張は結果的に般若経の二つの註釈、すなわちナーガールジュナの『中論』と、マイトレーヤの『現観荘厳論』を経由して、中観と唯識という二つの流れを形成してゆく。このことは、後代の多くの論書に見られるように、般若経の解釈において、『中論』では顕了の義の解釈を、『現観荘厳論』では隠密の義の解明を説くという解釈の系統を生じ、これに了義・未了義の解釈と絡めたインド・チベット仏教の教相判釋という呈をなして、それぞれの学派がその意味を分析していったのである。

また、後述するように、中国仏教の教相判釈においても、法相系の中心となる転法輪説として、取り上げられてゆくのである。

5．チベット仏教の転法輪

チベットでも般若経の註釈である『現観荘厳論』の注釈文献でハリバドラ（800年頃）の『小註』（*Abhisamayālaṃkāra-nāma-prajñāpāramitopadeśaśāstra-vṛtti*）、及びその復註であるタルマリンチェン（1364-1432）の『明義釈』（*Abhisamayālaṃkāra-nāma-prajñāpāramitopadeśavṛtti Sphuṭārthā*）、通称『心髄荘厳』では、「法輪に対して三つの順序の名前が直接［言葉で］説かれているものが『解深密経』に出ており、そして名称が直接［言葉で］説かれなくても所化を導く三つの順序によって説明するものが『聖陀羅尼自在王経』（*'phags*

pa gzungs kyi dbang phyug rgyal po'i mdo）に出ている。最初のものは、その『解深密経』に」云々として、上記に引用した『解深密経』の転法輪の箇所がそのまま引用される。

また、ツォンカパ（1357-1419）の『善説心髄』（*Legs bshad snying po* 1406年著）や、チャンキャ（1717-1786）の『教義規定』（*grub pa'i mtha' rnam par bzhag pa'i thub bstan lhun po'i mdzes brgyan*）、トゥカン（1737-1802）の『一切宗義書』（*grub mtha' thams cad*）などの宗義書においても、『般若経』と『解深密経』の転法輪の箇所がそのまま引用され、チベットにおける教判の基準になってきたのである。

その他、インド密教においても、『大宝広博樓閣善住秘密陀羅尼経』（大正蔵No.1005A 不空（705-774）訳）、『広大蓮華荘厳曼拏羅滅一切罪陀羅尼経』（大正蔵No. 1116 施護訳）、『諸仏集会陀羅尼経』（大正蔵No.1346 提雲般若訳）といった陀羅尼経典の教説にも継承されるように、後々までに伝承されていった。

まとめ

以上のように、仏教のスタートである初転法輪は、『律蔵』「大品」や『転法輪経』などによって驚くべき出来事として讃嘆され、伝承されてきた。般若経はその経典の描き方を踏襲しつつ、般若波羅蜜の教説を、これは新しいブッダの教説であり、第二の転法輪であると宣説した。それこそが大乗仏教の新たな説法形式の始まりだったわけである。

本稿ではこの第二転法輪の内容である般若波羅蜜がどのような教えであったのかを略説した。別稿[14]にて論じた点ではあるが、さらにその教えがマイトレーヤ（弥勒）を通じて将来も全く同じ名前、文章、文字で、またこの同じ場所で説法され、継承されてゆくことが説かれている。このことが瑜伽行派の開祖としてのマイトレーヤの般若経解釈についての伝承を生む根拠となったのであろう。また、それが『解深密経』の第三の転法輪を生む契機となった可能性さえある。

---

[14] 拙稿「般若経の第二の転法輪」『東方』第37号、（公財）中村元東方研究所、2022年3月、pp.105-121。

本稿ではその脈絡を検証するため、多くの第二転法輪を説く大乗経典を指摘し、その中からASを中心とした般若経諸本の記述を検討し、さらに最初期の大乗経典である支婁迦讖譯『道行般若経』、『伅眞陀羅所問如來三昧經』の用例を検討した。さらにその転法輪説の背景となった『大事』（Mahāvastu）から、大乗の『大乗無量義経』『宝積経』『解深密経』など複数の転法輪を説く経典の記述を見てきた。 このことによって、それらいずれも新たな学説を主張するための大乗経典の形式として、特有の役割を果たしていることが解明できたと思う。そしてこのような転法輪の伝承がチベットにおいても教相判釈の方法として採用され、広く展開されていったことを見れば、転法輪が仏教の展開を考察する上での基軸になってきたといいうるであろう。

なお、この説法形式を巡って、中国仏教でも転法輪が教相判釈の基準ともなっているという点が指摘できる。まず、竺道生（５世紀）が四種法輪を述べ、また同じころ劉宋の道場寺慧観（４～５世紀？）が『涅槃経』の序で説いた頓漸五時教判、それを批判した天台大師智顗（538-597）が『法華玄義』、『維摩経玄疏』、『維摩経略疏』で教相を発展させ、さらに三論宗の大成者吉蔵（549-623）が『大品遊意』や『三論玄義』などで、『大品般若経』『法華経』『涅槃経』等に説かれる第二の転法輪を教判の規範として言及している点に注目すべきであろう。

これに加え、天台の多くの学匠、たとえば天台二祖・章安灌頂の『大般涅槃経疏』、天台山家派の知礼の『観音玄義記』、『金光明経玄義拾遺記』が智顗の説を継承し、さらに法相宗の基による有教・空教・中道教という三時教、華厳宗第二祖智儼や第三祖法蔵による五教十宗、第四祖澄観の三時教という多種多様な教判も行われた。そして、このような中国仏教界の経典解釈学の基軸に複数の転法輪説があったのである。しかし、残念ながら本稿ではそれを考察する準備が整わなかった。この問題については別稿を期したい。

＜略号及び参考文献＞

AS：『八千頌般若』*Aṣṭasāharikā Prajñāpāramitā.*

D：デルゲ版カンギュル／テンギュル Buddhist Digital Resource Center（BDRC）にて公開されているスキャンデータを使用（https://www.tbrc.org/#!footer/about/newhome）

Harrison［1992］：Harrison, Paul M. ed., *Druma-kinnara-rāja-paripṛcchā-sūtra: a critical edition of the Tibetan text (recension A) based on eight editions of the Kanjur and the Dunhuang manuscript fragment.* Studia philologica Buddhica Monograph series 7. Tokyo: International Institute for Buddhist Studies.

Kimura［1986］：Takayasu Kimura ed., *Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā II・III*, Sankibo Busshorin Publishing Co., Ltd.

MVU：*Mahāvastu-avadāna.* Émile Senart par, *Le Mahāvastu* 3 vols., Paris 1882-1897.

PTS：Pāli Text Society

PV：『二万五千頌般若』*Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā.*

T：大正新脩大蔵経 大正新脩大蔵経テキストデータベース（SAT）にて公開されているテキストデータおよびスキャンデータを使用（21dzk.l.u-tokyo.ac.jp/SAT/index_en.html）。

Vaidya［1960］：P. L. Vaidya ed., *Aṣṭasāharikā Prajñāpāramitā* (Buddhist Sanskrit Texts 4), Darbhanga : The Mithila Institute.

梶山雄一［1974］：『大乗仏典2　八千頌般若経Ⅰ』中央公論社.

谷口富士夫［1993］：『西蔵仏教宗義研究　第六巻　―トゥカン『一切宗義』チョナン派の章』東洋文庫.

袴谷憲昭［1974］：『唯識の解釈学　解深密経を読む』春秋社.

兵藤一夫［2000］：『現観荘厳論の研究』文栄堂.

菅野博史［2022］：『中国仏教の経典解釈と思想研究』法蔵館.